記憶の創られ方を考える
――「人類」及び「継承」をめぐる力学

相川　美恵子

一　はじめに

八月ジャーナリズムという言い方がある。戦争関連の報道が八月に集約されている現象を言うものだが、皮肉だけではなく危機感も込められた呼称だろう。だが、年に一度でも何がしかの特集が組まれ、新しい事実が伝えられることで「そういえば」と思い出せることは奇蹟だと思う。日々のやりくりで人はいつも忙しい。それでもまだ今のところ、この国の多くの人は、片手間にでも「そういえば」と立ち止まる八月を持っている。視聴率とは別の物差しがあることをメディアも思い出す。それは悪くない。

ただし、八月ジャーナリズムが私たちにどのような記憶を思い出させたがっているのかについては、よく見極める必要がある。過去の全てを継承できない以上、過去は再生や更新の度に選別加工され、記憶化されて私たちに届けられる。私たちの気分や情動、平和への強い希いや祈りも、そうした記憶生成の場に動員されているかもしれない。当然ながら児童文学もまた、一連の記憶生成過程と無関係ではいられないはずだ。

とはいえ扱うにはあまりにも大きなテーマである。そこで今回は広島における被爆の記憶に限定し、さらに被爆の記憶と言ったときに連想される複数の言葉の中から「人類」と「継承」という二つの言葉に的を絞って考えることにした。具体的には、論の前半で二つの言葉が辿り来た歴史を簡単に振り返った後、後半で、比較的最近出版された児童文学作品の中から主に、小手鞠るい『ある晴れた夏の朝』（偕成社　二〇一八）と、中澤晶子『ワタシゴト　14歳のひろしま』（汐文社　二〇二〇）を取り上げる。

二　「人類」について

1　碑文論争の始まり

被爆からきっかり七年後の一九五二年八月六日、広島平